
私に何か用ですか？

琉菟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私に何か用ですか？

【Nコード】

N8770X

【作者名】

琉菟

【あらすじ】

蜂窩遡乃は、平凡で地味な人生がある男によって潰されたが！！この男はある意味危険な真面目なさわやか系男だった？

男は依頼で遡乃を必要としているのだが、遡乃は弟と地味で平凡な生活があれば良かったのに。学校にもその男は現れ、隣のクラスになりそこから学校生活までもが潰されそうで・・・

遡乃 出会い

．．．．．いきなりなんですけど。

「あの私に何か用ですか？」

えと、初っ端からごめんなさい。いきなりにも程がある感じなんですけど状況からしてこうしか言えないんです。

でも自己紹介をさせていただきます

私は蜂窩遡乃ほつかそのと言います。一応17歳として平凡な地味人生を歩んでいたんですけど、今のこの状況からして一気に平凡では無くなりました。

「．．．．．」

「．．．．．」

無視ってやつなんでしょうかね？これは。

嫌でもじーっと見つめられてたら無視にはならないんでしょうか？ああ逃げたいけど手首捕まれてるし、見つめられてるし、他の人の視線は気になるわったらありゃしない。．．．．．ってかこの人だれ知らない人じゃん。そう思うと、ああ．．．ヤバい叫ぼうかな。

それとも通報した方がいいの？ってか誰か助けてよ。この状況を理解して逃げさせてください。

いやまず、手を離してもらおう。汗ばんできたし、又メ又メ言いそうだし．．．．．

「……あの手を離していただけたら嬉しいなあと思うのですが、

「……」

「……それが顔を見ないでいただけたらもっと嬉しいのですが、

」

なんでやめないんでしょうか。……いやもう通報しかないかな
やっぱ。ってか耳聞こえてんのかな？でも真面目そうだしこんなヤ
ンキーみたいな事はしなさそうなのに、じゃあ何？えっどうしよう
通報しちゃうか。しちゃおうか。うん。そうしよう。えと携帯は・

……あつあつた。警察は確か110番だった気がするからポチポ
チっと。でも耳に近付けられないじゃん。ああ冷静なはずなのに慌
てるよ、うち。ってか「……おい」このままじゃ警察に迷
惑がーよし！切っちゃうか。「おい、聞いてんのか」でも、そん
なことしたら良心が痛んじやうよ、どうしようか。切っちゃうしか
もう方法は無いしなあ……。「……おい、今から反応しねえと
キスすんぞ」いや良心よ勝手に痛め！切ります！123・プチっ。
はあー疲れた。汗がダラダラだ。もう帰りたいんだけどなあ……
マジでキスすんぞ」……ってかさつきから何か聞こえる気が。

「あの何か言いましたか？」

「キスすんぞって言った」

「……ああごめんなさい。私ちよつと幻聴が聞こえたみたいで、

」

なんでそう言ったら手首を強く引いたんだろうか？

「・・・お前、そんなにキスしてもらいたいのか？」

「・・・・・・・・はい？」

つてか耳に息がヤバいんですが、一瞬間ただけで声が凄く好きなんです。

「・・・・・・・・ごめんなさい。手を離してもらいたいです。そして逃げさせてください。つてか叫ばせて下さい。そして通報をしても良いですか？私としては早く家に帰って課題などがあるのでそれを終わらせたいのですが。」

「・・・・・・・・いや早口すぎんだろ。つてか課題とか知らねえから」

「いや、そんなの知ったこっちゃありません。さっき質問した時に答えてもらえれば私としては、嬉しかったのですが。何故、数分経つてから言うのですか？その返答次第で態度が変わりますけど」

「（会話噛み合ってるねえ）・・・・・・・・いや何か、お前がある人物に似すぎて驚いてた」

……だから何。

「……はっ？お前つぎつけんなよ！！こちら何でこんな街の中で知りもしないタメの男に手首を掴まれなきゃいけねんだよ！手首を掴まれた時に言っただろうが！！綺麗な言葉ですよ！なのに数分経つてからなにが「ある人物に似すぎて」だ！知らねんだよ、こっちは課題があるつつつてんだろうが！！なめたマネしてんじゃねえよ！こっちはお前に関わっている時間がねえんだよ！！……もう少しありますがこれぐらいにしましょう。それともまだ言わせていただいても良いなら言っておきたいのですが」

「そのキレ方まであいつに似てんな。……まあ良いから来い」

あのブチギレて良いですよ。これは。……ってか手首放せよ。オラッ！！

……ああだから男は嫌だ。ああイラつくな。ぶん殴っていつてから家に帰りたいなあ。

「さつきから意味が分かんねえ……分からないんですが。きつちりと説明をしていただきたいのですが」

「来たらしてやるから来い」

「今、ここでしょうよ。課題があるつつつてんだろ」

「……………めんどくせえな。」

と這いつちを顔面に近付けた。……………ってこれはキスというものですか？ああ殴りまくりたい。特に顔面を、そして口を拭きたい。あああああああああああ気持ち悪い。

「……………んあ？ひやはふえ！！！」

「……………あつ。やつちまったけどまあ良いか」

いや軽いだろ軽すぎんだろ。まあ慣れてるけどさ。でも軽い。ってか、殺気が芽生えてきた。あははは。

……………ああもういいや。課題を諦めてこの人に流されてみるか。

「はあもう良いよ。ついてきや良いんだろ？……………じゃあ連れてけよ」

「お前言葉が、急に悪くなりすぎだろ。……………何？照れたのか？」

「……………よし、今からお前を殺しても良いですか？良いよね。それならカッターがあるから首を切ってやるからちよっと待とうか」

遡乃 出会い（後書き）

えと・・・

これが初になってしまつのである意味処女作がこんなので良いのでしょうか？

ああ、遡乃ちゃんのキャラ設定と男の名前やら後の、物語をどうしましょうか？

1話がこんなので後々があはははははですな。

興味を持っていただけならそれは幸いです！！

遡乃 ご用件

今からあるビルの一室で、ある質問をされます。その返答次第でおm・・・貴方の人生が変わります。その質問で俺と関わる事が増えても良いならこの中に入って下さい

・・・と少し変な丁寧口調で、変な一室の前で男に言われた言葉がこれなのですがね？
じゃあ帰っても良いという選択肢はあるという事で無言で帰ることにしたら。

「おい、待て。・・・弟がこの中にいると言ったらどうする?」

「はい?・・・脅迫かよ最悪だな。はあ、入れば良いんだろ」

「・・・いや別に入らなくてもいいぞ」

「意味分かんねえから。さっき入って言っただろ」

はあ。殴り倒したい。しかも脅しとか何？・・・弟までここにいるとか意味不だ、弟の為なら何でもするけどもコイツに関わるのが嫌でしょうがないし、ああ嫌だ。つてか1回だけ中に入って蒼夜を連れて逃げれば良いんじゃない？そうしようか。そうすれば安心・・・んな訳ねえか。見るからに怪しそうなコイツが何をしてくるか。もういいや入る。

「じゃあ入ります。」

「どござ」

ガチャ

「・・・シイさん、連れてきました」

「知らないし眠いし。」

うっわ暗い部屋だな。カーテンで閉め切っている上に蛍光灯は無いし。というかこの人は世でいう引きこもりなのか？こんな暗い部屋で可哀そうにフリーターだなんて、このご時世には辛いだろうに。つてか蒼夜はどこ。蒼夜が居なきゃここに居る意味がまっさら無いんだけど、ああなんかイチャイチャしてるよやめてよ。目が腐るっ

てか腐った。おえ。やだやだ、本当にそついうの嫌いだな。ああそだ、蒼夜を探さなきゃ。」

「蒼夜ー。どー」。

「・・・遡乃？居るの？」

「ちよい待ち。そこの姉弟たちよ」

「・・・何でしょうか？」

「あのね遡乃ーその人がなんか聞きたいことあるんだってさ」

「ってか春斗、説明してねえのかよ」

「当たり前。めんどいし、ここでシイさんがすれば良いんじゃないかねえ？って思ってる」

「殺すぞ。1分以内に説明しろ」

「・・・ここはシイさんの事務所であり名は、シイタ・マキ。名を聞けば分かると思うが、榎グループの本社だ。会社としては何でも屋みたいな事をしているんだが今回は、お前にある依頼を協力してもらいたい為、ここに連れて来た。・・・これで良いか？」

「まあまあだな」

よし、蒼夜と一緒に逃げようかな。頭が狂う前に、テレパシーしなきゃ。

作者、説明頼みました。・・・説明をさせていただきます、作者です。はあ、全然春斗の説明を聞いてなかったっばいですね。可哀そうに。というか任務は果たさせてもらいます。まあこの2人は姉弟だからなのか、なぜかテレパシーがいつでもどこでも使えるという設定にしております。距離は何mでも県が遠くても使えるんですね。まあ簡単に言えば、姉弟だけが使える携帯みたいなものですね。

【テレパシー内】

(蒼夜。一緒に逃げよう)

(ええー面白そうじゃん。遡乃やれば?)

(・・・依頼内容によるが蒼夜の晩御飯が消えるがそれでも良いなら)

(よし、帰ろう)

(じゃあ蒼夜が走ったら、うちも走るから)

(了解)

「なあ春斗、なんでこいつら黙ってたんだと思うっ?」

「さあ? 知らね。」

「・・・つてか早く依頼内容を言っつてやれよ」

「はいはい。おい、遡」

「遡乃!!」

「分かつてる!!」

蒼夜は走り出し遡乃もその走りについて行くこととしたが・・・

「はい。ちよつと待とうか」

と言い春斗がまた、遡乃の手首を掴んだ。

「離せ!!!」

「遡乃!? 大丈夫!？」

「仲が良い姉弟だな。・・・今から依頼内容を言っつ、よく聞いとけ。詳しくは部外者のお前には言えないが、半年間俺と付き合っつてもらっつ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・気持ち悪い。吐く」

この2人は依頼内容で付き合う理由は？そして何故、遡乃なのか？
この謎は2つに1つ！！
そう・・・真実はいつも1つ！！！！

遡乃 ご用件（後書き）

ああ途中からナレーター場所がうちに代わってしまったので今後もうちで続けたいと思います。ってか最後の終わり方ごめんなさい。某アニメ番組が頭の中に出てきてしまい・・・

遡乃ちゃんの弟くん蒼夜。

この子は本当に可愛いキャラとして今後の扱い方を考えなければ！ある男は春井悠斗というのですがね。まあ意外と悩まずに出てきてくれて嬉しいと思います。

遡乃 学校生活（前書き）

なんか数日後になりました。

遡乃 学校生活

事務所に行ってから1週間後。

平日だからなのかバタバタとしている、ある1軒家。
その中で最も忙しそうにしていたのは……

「遡乃ー起きろー!!」

「……………おはようです」

「はいはい。起きましょうね」

この家の主の弟であった。

「あのおさ今日も学校あんの分かってる？」

「……知らなかったです」

「寝ぼけはやめようねー」

「……すみません。じゃあ、着替えてもよろしいですか？」

「ああごめん。じゃあ弁当用意しとくから」

「ありがとうございます」

蒼夜はそう言い下に降りて行った。蒼夜が降りて行っている間にノロノロと着替え準備を行っていき、下に降りて行ったら。

「……ああはいはい。その内会って良いんじゃないんですか」

「分かりましたから。もう1回それ言ったら、呪いでもかけてあげましようか？」

「嘘じゃねえよ。うざい。もう切るんで、では」

「……誰から？」

「いや、気にしないで。弁当できたから持って行っていいよ」

「……朝食」

「ああできてる。食べて」

遡乃は低血圧である為か、朝は特に機嫌も悪ければ体調もすぐれない。この、姉弟にとつては普通であるのだがもし、倒れてしまった場合2人で助け合う事になっている。理由としては・・・両親が居ないのと親戚近所に親しい人が居ないからである。中学生から2人きりで暮らしているのだがそろそろ金銭が、危ういと思っているのだがどこからか勝手に入金されている為、無事に暮らしているのが現状だ。

「遡乃ーもう食べた？」

「・・・すみません、後ちょっとなんで」

「良いよ。急ぎすぎて喉に詰まらせちゃ、こっちが困るから」

「あと少し。あのさ蒼夜、今日って何の授業だったけ」

「科・数・体・歴」

「4時限だけなの？」

「体育が2時間」

「・・・帰っていい？」

「食べ終わったね。・・・じゃあ今日は遡乃が後ろに乗って行ってね」

「じゃあ行く」

家からやっと出て、2人乗りをする2人にとってはここからは凄く
楽な時間であった。

・・・後、この2人は姉弟と言っても数分違いに生まれた2卵生
の双子であるのでお見知りおきを。

高校前

「はい。着いた」

「あざっす。じゃあ早く行く」

「・・・降りるの早いから、自転車を止めさせて」

蒼夜が自転車を止めに行っている間。

「蜂窩ー！ーおっはよう！ー」

バシッ

「・・・人違いです。そして痛いです」

「あぁごつめん！そーちゃんの方だったんだ」

「どなたか存じ挙げませんが蒼夜はあつちなんで」

「そーちゃんつたらー！華だつてばー！」

「・・・知ってる。」冗談」

朝からこんなにも元気なのが、姉弟にとっての唯一の理解者である熊村華である。意外といろんな場所で助けられているんだが、華は蒼夜の事が好きなのだ。蒼夜にとっては邪魔者ではない。遡乃としては面白い関係だと思っている。

「遡乃ー。・・・行くぞ」

「待つて蒼夜。華はどうするの？」

「えっ、捨てるよ。そんな奴」

「蒼つたらー！そんな事言わないで一緒に行こうよーねっ？」

「吐き気しかない。」

「でも遅れるよ」

「そーちゃん！」

「まあ、遡乃がそういうなら・・・早く行くぞ」

「やったー!!!そーちゃんありがとう!!!」

そんなこんなで教室に着いたのだが、華だけクラスが違うので途中で別れてから走ってきたのであった。もちろん、蒼夜と遡乃は同じクラスであり姉弟とか関係なく席も隣である。

「そーちゃんおはよう」

「うん。おはよう」

「蜂窩姉弟、おっす」

「中木、今日は一段とうざいな」

「なんで!ねえなんで蒼はいつもそんなこというのさ!..!」

「気にすんな。ただ単にお前が嫌いなだけ」

「蒼のバカー!?!泣くよ?ねえ泣いていい?」

「勝手にしろ」

「なんかカッコいい!!!そんなことを言っている、蒼がカッコよくみえる!」

「オカマだとは・・・初めて知った」

「・・・うるさい。黙れ」

ガヤガヤしていた朝の教室が遡乃の一言で一瞬にして静かになってしまった。

さすがの蒼夜もこの一言で静かになってしまった。

「遡乃ごめん。調子に乗りすぎた」

「蜂窩すまん。」

「黙れ。うるさい」

「遡乃ごめんね。中木には注意しとく」

「嘘でしょ!!蒼!!」

「・・・もういいです。席につきましょっ」

これが普段の朝の日課であった。

いつもいつもこんな事を繰り返して朝を過ごしていく2人である。

遡乃 学校生活（後書き）

まあ新キャラ登場ってやつです。

熊村華は蒼夜LOVEなのでいるんな場所に今後出てくるのでは？

遡乃の事も好きなので嫉妬とかいうめんどくさいのはないです。

蒼夜は、もうこの話で分かったと思うのですが・・・

遡乃が大好きです。遡乃に危害があると知ったら事件が起こると言われます。遡乃と同じように興味が無いものには冷たいです。蒼夜の場合は、遡乃以外興味を示さないので全ての人に冷たいがもっと嫌な人には腹黒さを出します。

次回はそんなのが出せたらなと思っていますので！

蒼夜 学校生活

3・4時間目である、体育。遡乃は休みたがっていたが、クラスの女子共に説得させられて今はだるそうに走っている。けど、何故か1位をとっているのが不思議でたまらない。

「遡乃ー！！走っていても可愛いよー！！」

「一応、褒め言葉として受けとっておく」

「そーちゃん、次あれだつて」

「ああはいはい。休むね」

「ダメ、行くよ。じゃあね蒼」

「遡乃に怪我させんなよ」

「分かってるから」

「えー。蒼夜止めてもいいじゃん」

「いや、成績の為にちゃんとやっつてね？」

「……ケチ」

ああ可愛いなあーとか呟きながら蒼夜は休憩に戻って行った。
遡乃は、クラスメイトに連れていかれながらそんな蒼夜を見ていた。

「あんさー。蒼夜ってシスコン？」

「ブツ……気付かなかったの？」

「いやそれっぽいなあーとは思ってた」

「まあ隠してないからね。あれは」

「告白もうちを、理由に断ってるんでしょ」

「おお！当たり前。うちの友達もそれで断られたってさ」

「ごめんなさい。」

頭を下げ、謝った遡乃。

「いやいや！！やめて！！蒼に誤解されそうな光景になっているから！！」

「……ごめんなさい」

「遡乃ー！！やめてー！」

「おいお前ら、授業はどうした」

「ああすみません。休憩してたら時間が分かんなくなっ

「蜂窩と佐倉か・・・今後は気をつけるように」

「すみませんでした」

「授業が始まっているから早くしろ」

「はい」

叱られてしまった。蒼夜にバレなきゃ良いけど。

蒼夜は遡乃に関わった男は全て抹殺するという、噂が流れているらしい。

・・・例え、教師であっても。

「今の、蒼夜に内緒ね」

「・・・分かってる」

「ってことで、佐倉連れて行って」

「そーちゃん、自分で行こうよ」

「・・・はあ、佐倉がこんな悪魔だったなんて」

「はいはい！分かりましたよ！連れて行きます！..！」

こんな風にゴチャゴチャと喋りながら授業に行ったのであった。
その頃、蒼夜は。

「中木ー。これ持ってこい」

「へいへい」

「次これな」

「へいへい」

「それは場所が違う」

「すまん」

「んで、これをそこに」

「へいへい」

「あんさ蒼、自分で動かないのか？」

「当たり前だろ？中木を使わなきゃ腐る」

「そこまで言う！？」

「でも、蒼は体育好きじゃなかったっけ？」

「好きだよ。走るのが」

「球技も好きだろ？」

「まあ投げるのだけね」

こんな会話をしていていいのか、分からないが教師は蒼夜がいる為なのか、見ないようにしていた。

「蒼ー！！こっち手伝って！」

「はいはい」

そんな蒼夜だからなのか、男子から大人気でいつも頼られている。こんな事を言ったのが、女子だったら殺されていたかもしれない。

（遡乃。大丈夫？）

（何が？）

（怪我とか・・・）

（うん。してない、健康体）

（ならいいや。お昼は屋上でね）

（分かった）

「蒼？何、黙ってんの？」

「遡乃の事考えてた」

「怖っ。それが無意識なのが怖い」

「まあいつもの事じゃん。・・・なんでそんなシスコンなのかが分かってきたかも」

「遡乃は本当に可愛いよな」

「・・・・・・・・」

「ああ間違いを起こしてもいいかな？」

「絶対にやめる!！」

「・・・冗談に決まってるだろ。何、本気になってんの」

「絶対に蒼だったらやると思ってる」

遡乃はこんな会話があった事も知らずにのびのびとダルそうに授業をしていた。

蒼夜 学校生活（後書き）

いいや。連続で次の話行きます。

蒼夜 お昼

お昼の時間。この時間、恒例の事をまず見ていただけたらと思います。

屋上での2人なのだが・・・

「蒼夜、この卵焼きちょっとしょっぱい」

「嘘！マジで・・・ごめん。寝ぼけてかな」

「別に良いよ。新鮮で」

「本当にごめん。・・・代わりにトマトあげる」

「やった！トマト〜！！ありがとう、蒼夜」

満面の笑みで言われてしまったらこっちは、鼻血が出そうなのだが、ああなんでこんな可愛いんだろうか？

「遡乃ー。アレやっていい？」

「・・・ヤダ」

「トマト3個もあげたよ？」

「卵焼きの代わりだし」

「卵焼きは1個だけじゃん」

「大きさが3個でちょうどだし」

「いや、1個でちょうどなはずだよ、今日のは」

「・・・分かったよ、やって」

「よっしゃ！・・・じゃあ」

そう言って、蒼夜は遡乃の方に近づき、抱きしめて・・・

「蒼夜、強い」

「だってこうでもしないと逃げそうぞ」

「絶対に逃げないから」

蒼夜は遡乃に顔を近づけ、おでこがくつつく程まで近くになったら。

「・・・可愛い」

「照れる」

「顔が本当に真っ赤だよ。キスしていい？」

「どうせするじゃん」

「まあ・・・ね」

キスをした。これで何回目なのかが分からないが、これは中学生の頃からの習慣で1日に3回はしていると思う（蒼夜談）

「・・・ん。」

「・・・なんか今日の長かった」

「だって、可愛いんだもの」

「照れる」

これが、お昼の恒例である。特に酷い時はディープになるがまあ、そんな気にしないのが遯乃である。

誰か居た場合でも、隠れてやるのが蒼夜にとっては面白いのでそういう時の方が特に長い。

「蒼夜、そろそろ時間」

「ああそうだったね。・・・でも、このままサボりたいんだけど」

「じゃあうちも一緒にサボる」

「じゃあ中木に伝えなきゃ」

「寝る」

「分かった。上に行く？」

「めんどい」

サボりたいのもいつも一緒。授業を受ける時も一緒。この2人が離れる時間は無いとも言える。正直に言うと、蒼夜が遯乃を離さないのだが。蒼夜はこの時間が本当に大事だと思っている。

（遯乃は絶対に離さない）

（・・・蒼夜聞こえてる）

（うん。分かってる。わざとだよ）

放課後になるともつと過激になるのだが、今日は1つ違う事が起こってしまった。

「遡乃ー！帰ろう！」

「あれ、ラブレター貰ってなかったっけ？」

「・・・捨てた」

「体育館裏なら近いから行ってくれば」

「よく分かったね。じゃあ遡乃も行ってらっしゃい」

「はいはい」

通じ合ってるって怖い。遡乃の方も用があるのは分かってたけども、
やっぱり怖い。
ぱっぱと断ってくるか。

「来てくれたんですね！！付き合ってください！！！」

「お前、俺の何を知ってる」

「・・・え？シスコンなのも知ってますよ」

「じゃあ答えは分かるだろ」

「でも、諦めきれずにしてしまいました」

「そっか。おめでたい頭だね、早く諦めればいいのを」

「・・・でもまだ好きでいていいですか？」

「勝手にしろ、変な行動でも起こしたら殺すけどな」

「はい！！分かってます！では」

意外といつもより早かった。けど、興味が湧かない。遡乃でも待つてれば気分が晴れるか。

こんなにも冷たい蒼夜は遡乃前では、1・2回しか無い。

「蜂窩姉ー。明日からコイツを頼んでも良いか？」

「先生、男に見えるのは気のせいですか？」

「まあ、しょうがないだろ。春井が自分から言い出したんだから」

「先生の命日が近くなりましたね」

「蒼にはお前からどうにか言ってくれ！」

「・・・トマト10個ですよ」

「分かってる！じゃあ忙しいから春井を頼んだ。春井は教室にでも連れて行ってもらえ」

「うーっす」

「じゃあ、来て下さい、教室は確か同じなんですよね。ついてきて
トキ」

春井を連れて教室に、着いたのだが。ここから遡乃は非凡な人生になっ
て行く。

「春井とか言う人は、明日からなのに今日来るっていつのはそうと
う暇なんですね」

「まあ事情が事情なんで・・・あの、蜂窩遡乃さんですか？」

「はい？そうですが、なぜ名前を知っているんですか？」

「・・・俺の事が、まだ分からないか？」

「知ったこっちゃ・・・ん？もしかして」

「先週振りだな」

あの男がこの学校に来るとは蒼夜以外、誰も知りもしなかった。
しかも、同じクラスになるとは・・・
ここからが、本当の　　である。

「遡乃、遅いなあ」

蒼夜 お昼（後書き）

なんか先が、想像されそうで怖いっす。

悠斗はここから登場となります。

そして、蒼夜の本性も明らかになってくるので・・・

文の書き方をちょっと変えてみたのですが、分かりますかね？
気付いてもらえたら嬉しいですw

遡乃 日常生活

(この女、黙っちまったよ)

春井はそんな事を思いながら、遡乃に言葉をかけてみた。

「まあ、明日から同じクラスなんでよろしくです」

「え。この人誰？こんな爽やかな人は知り合いに居ませんのでさようなら」

「おいおい、待て。知ってるだろ。先週を覚えてんなら」

「分かりましたから。私はもう帰らせていただきます。では」

「………また明日会いましょうね」

世で言う、爽やかスマイルでこんな言葉を言ってみただが。
あの女は「つちを見ずに出て行きやがった」。

「まあいいさ。明日からどうせ付き合っただし」

この咳きはもちろん誰にも聞かれなかった。

遡乃はこんな眩きも知らず、今までに無いような速さで走っていた。

「蒼夜ー！！死んだ！今からうちは死んだ！！」

「日本語がおかしいけど……。何、男に名前でも呼ばれたの？」

「いんや。先週の男がここに転校してくるらしく」

「分かった。今から軽く殺してくる」

「それは、明日にして。……。まあ、うちがその人を案内とかする人になつた」

「……。ちよつとここで待ってね」

そう言い、職員室の方へ走って行きそうになつたがトマトの件がある遡乃が止め、未遂に終わった。

「蒼夜、トマトがうちを待ってるからダメ」

「なんか遡乃が言うとは思えない言葉が聞けた！！！！」

「……………もういい。帰る」

「ちよい待て。一緒に帰らないと晩御飯ができない」

「今日はうちが作るはず」

「食材が無いよ」

「蒼夜が1人で買ってきて」

「一緒に行った方がトマト買えるよ?」

「5パックね」

「良いから!一緒に行くの!分かった!?」

「・・・はい、分かりました」

どこぞのカップルだとツツコミそうになったが、止めた。

蒼夜とか言うやつがこっちに気づいてるから、へたに前出たら、死ぬ気がするし。

明日から蒼夜とか言う奴は、危険人物にしておこう。

「遡乃!何してんの!早く行かないとセールが終わる!」

「何か声が聞こえただけ!。じゃあ後ろに乗せていって」

「代わりに人參たくさん料理!」

「じゃあ、オムライスで良いか」

「分かったから!早く乗って!!」

蒼夜は遡乃を急がせて、発進しようとしていた。遡乃はこれでも急いで・・・いなかった。ようやく乗れたのだが、遡乃は疲れてしまいもう喋る気がなさそう
だ。

「遡乃大丈夫・・・夫じゃないね」

「はあはあはあ・・・」

「まあ良いや。漕ぐからね」

「はあはあはあ・・・」

スーパーまで5分、ムキムキな人が2人乗りをマツハで漕いでセルに間に合うぐらいだ。
まあ蒼夜にとってはなんとも無い距離のだが。

「着いたよ。遡乃、起きて」

「いや起きてる」

「でもさっきまで死んでたでしょ？」

「・・・早くしないとセールが終わる」

「逃げた。・・・まあ良いけど、トマトは自分で取ってきて」

「オムライスといつもものスープの材料ね」

「分かってる、じゃあまた後で」

「はいはい」

トマトの為にありえない程のおば様達を、押しつけ野菜コーナーへ行った遡乃を見届け、蒼夜はオムライスの材料などを取りにいった。

(トマト取った?)

(とっくに取ってある、今はお菓子)

(じゃあ、フルーツポンチにするから好きなもの取っておいて)

(分かってる)

(じゃあ早くしてね、レジの近くに居るから)

遡乃の好みと蒼夜の好みは一緒だから悩む物は何も無いんだけど。フルーツをノロノロと手に取っていき、レジの方に向かっていった。

「蒼夜、はい」

「ありがと。先に行つてて」

「うい」

そう言われ袋詰めをする所に行き、蒼夜を待っていた。

「はい。会計終わった」

「じゃあ先に行つてて」

「うん」

ここからは遡乃の仕事で袋詰めの巧さは、蒼夜でも抜かせない程だ。
数分後。

「行こ」

「バッグ」

「はい」

ほぼ単語で分かりあえているのもある意味凄いのだが、この2人にとっては当たり前。

家に着いて無言でいっても不穏な空気は全くない。

「オムライスできた。フルーツポンチも」

「こつちも準備できてる」

「いただきます」

「今日のは失敗した」

「全然分かんない、成功してる」

「なら良い」

これが毎日の会話だったら恐ろしいのだが、毎日の会話である。
ここから風呂まで無言タイムになってしまう。

「そろそろ入る？」

「うん」

「今日是一緒だったから早く入ろう」

「パジャマ」

「持ってきてあるから」

「寝るのも一緒だったっけ？」

「そっだよ」

この会話もある意味恐ろしい。聞いてれば分かる通り、風呂と就寝に関しては一緒に入る日と入らない日があるらしい。今日は一緒に

入り、一緒に寝るらしい。

2人に離れるは無いと思った今日この日。

遡乃 日常生活（後書き）

遡乃 転校生

翌日の朝。

「遡乃ー、起きてるでしょ。弁当ぢいすんの？」

「……作ってって」

「はいはい」

「後、トマト」

「机の上にあるから」

「お茶」

「机」

「リップ」

「2番目の引き出し」

「一応メガネ」

「じゃあ俺のメガネも」

「紫で良いね」

「遡乃は黒ね」

「・・・卵焼き焦げてる」

毎朝の会話にしては、慌ただしい今日。
何かが起こらなければ良いのだが・・・

「着いたから、早く降りて。」

「バツグ」

「ああじゃあ、これも」

「・・・待って。髪の毛引つかかった」

「なんで、遡乃の髪の毛短いじゃん」

「嘘ついてみた」

「ちょっと可愛い！！朝からこんなに可愛いのは反則だよ！！」

衝動的に抱きしめた、蒼夜。遡乃は髪が肩に着いていて巻いているので、引つかかるはずは無いのだがこの嘘はさすがに無かった。蒼夜も今時の髪型なので、引つかかるはずはない。

(強い。ってか何かたくさん来たから)

(気にしないで。俺だけを見て)

(いや、見てるけどさ。視線が痛い)

(じゃあキスする?)

(教室に行こうか)

(・・・はい)

「あの2人って蜂窩姉弟?」

「でしょ?こんな朝からイチャイチャしてんのはあの2人しか居ないから」

「ホントにカップルに見えてくる」

「重度のシスコンとブラコンなんですよ」

「まあ姉は成績優秀で図書委員長ですよ」

「弟は生徒会書記で裏生徒会長、運動と成績優秀なんですよ」

「姉ちゃんの方はミスなんとかですよ」

「弟の方もシスコン王子って言われてるんだって」

「・・・美男美女なのになんであんな性格がひん曲がってるんだか」

「そこは分かる！」

周りの野次馬達は2人の噂の事をいろいろと言っているが、2人には関係ないオーラを出しており無言で教室に向かっていった。

「おはよ」

「おはよう」

「委員長!!!待ってました!!!この事について聞きたいことが」

「ああ後で」

「蜂窩先輩。前回の会議でまだ不明瞭な所が」

「放課後にまた会議やるって生徒会長に言っておいて」

「はい分かりました」

「朝っぱらから忙しそうな2人だね・・・」

「遡乃帰りは？」

「遅くなるけど、いつもの所にいる」

「俺も遅くなるからちょうど良いかな」

「・・・まるでカップルだな、この会話」

「いやもう夫婦だろ」

ガラッ

「席に着けー。転校生居るから」

「先生ーそいつ爽やか過ぎませんか」

「蜂窩姉弟でもう十分なんすけど」

「分かってる。断つたのだがクジで負けたんだよ!」

「・・・運無いね」

クジで転校生のクラスを決める、この学校はいろいろと不安になるが気にしないのが1番だな。

「自己紹介はめんどくさいなあ、適当にしといて。後は蒼に任せた」

「先生。後で、遡乃の分のトマトを貰いに行きますから」

「・・・ごめんなさいでした」

「じゃあ転校生、自己紹介」

「えと、自己紹介します。春井悠斗はるのこゆうとです」

「全体が爽やかすぎるだろ」

「何、あの黒髪。似合いすぎ」

印象としては良いらしいが、興味が湧かない。逆に殺意が芽生えてきた。これからコイツに遡乃が関わってくると思うと殺したくなる。

(蒼夜。トマト貰ってきて)

(分かった、進行は中木にやらせといて。後、その男に関わらないで)

(ん)

「中木。進行やれだつて」

「えっ！蒼は？」

「トマト貰いに行った」

「マジで！？・・・春井に質問がある人」

「無い」

「じゃあ席着いて、あの女の隣」

「分かった」

「はい、みんなは授業の準備ね!!」

悠斗の席は3列目の前の方で全然、近くなかった。
そんな時蒼夜は担任を脅していた。

「先生。遡乃を選んだ理由を5秒で言え」

「ごめんなさいごめんなさい、あっちが何か知ってるっぽかったからです」

「……俺がキレると分かって先生は遡乃を出したのか」

「いえ!こっちが拒否してもしつこく迫ってくるから」

「じゃあ、あの男の情報を全て渡せよ?…んで、トマト」

「もちろん、10パックにしたから許して下さい」

「次、遡乃に変なことを関わらせたら、情報を全てバラすからな」

「承知してます。じゃそろそろ授業が」

この関係も気になるが後々、出てくるだろう。
それも淒く後に。

上下関係が本当に逆な気もするが、蒼夜にとっては関係も無い事だ。

蒼夜 授業

午前11時。一見普通の学校では、授業が行われているはずなのだが遡乃達に通っている学校では、授業を行っているクラスもあれば、授業になっていないクラスもあった。

遡乃達のクラスはどちらかというと・・・

「蜂窩姉。この部分分かるか」

「・・・源義経」

「正解なんだが、できれば起きて答えてくれ」

「先生。遡乃は眠いので寝かせて下さい」

「蜂窩弟よ、先生も眠いのを我慢してるんだ。起こしてくれ」

遡乃達のクラスは歴史と数学ではこの会話が日常茶飯事になっている。

悲しい事に先生は、蜂窩姉弟に苦勞してもう3年だ。

「先生！。授業を進めて下さい」

「分かってる・・・もういい、自習にしてくれ」

「じゃあプリント置いていって下さい」

「引き出しのはもう無いのか？」

「とっくに切れてます」

「係、一緒に来い。先生はもう帰るんでじゃあ」

「ありがとうございます」

先生はそう言い残し職員室に行った。係もプリントを取りに先生について行った為、待っている間暇になってしまい皆、悠斗に喋りかじめた。

「春井ってさ、どこから来たの？」

「千葉だよ」

「東京に来た理由は？」

「仕事の関係で」

「頭って良いの？」

「まあまあだと思っよ」

(・・・遡乃、あいつ殺してきて良いかな?)

(トマト食べたい。)

(さっき10パック食べたばっかじゃん)

(足りない)

(後で盗ってくるから、待ってて)

(じゃあ寝てる)

(…おやすみなさい)

「 ……あのさ蜂窩さん? 」

「 何か 」

「 いやそつちじゃなくて、姉の方に用があるんだけど 」

「 今寝てるんで、邪魔すんな 」

蒼夜は急に話しかけてきた、春井に地味にキレており間違いで殺してしまいそうな殺気を出していた。周りは先ほど戻ってきた係からプリントを貰っており、真面目に行っていた。

「 遡乃に何の用 」

「先週の件でちょっとね」

「そうか、死ね」

「それと何でこんなにキャラが違うのか不思議なんだけど」

「それか席に戻ってプリントでもやってる」

「・・・まあいいか、また後で」

悠斗はじつと遡乃を見つめてから席に戻って行った。

そんな悠斗が気に入らないのか、蒼夜は遡乃をイジっていた。

そうしている内に授業も終わりになり、お昼に行こうとしていたら

・

「遡乃さん、一緒に食べない？」

「あの結構です。中木と一緒に食べていて下さい」

「即答か・・・トマトのお菓子あるんだけど」

「行きます、蒼夜も一緒に」

「いや遡乃さんだけで良いんだけどな」

「名前を呼ばなかったら一緒に行きますけど」

「・・・そーちゃん行こう」

「いやいや待て。遡乃ダメだろ」

「トマトのお菓子ある」

「俺は生トマト持つてるから」

「じゃあ蒼夜行ころ」

手を引き、屋上の方へ走って行った2人。
そんな2人を見ていた悠斗。

「手強いな、弟の方」

眩きは雑音にまぎれ誰にも聞こえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8770x/>

私に何か用ですか？

2011年10月28日13時10分発行